

国際シンポジウム「災害が遺したもの——語りつく記憶と備える文化」

趣旨説明

池澤 優

以下は、二〇一三年三月八日（金）に東京大学文学部法文二号館一番大教室で開催された国際シンポジウム「災害が遺したもの——語りつく記憶と備える文化」の報告である。本シンポジウムは、フランス国立極東学院とトゥールーズ大学の協力を得て企画された。ここに改めて言うまでもないことであるが、死生学・応用倫理センターは二〇〇二年以来COEプログラムとして活動してきた「死生学」プロジェクトの後継組織であり、COEのプロジェクトは数限りない大規模な研究集会を開催してきた。一つ一つの研究集会は一種の「お祭り」のようなものであるが、COEの一〇年間の活動の中で体感したのは、そのような「お祭り」を継続して開催することは、斯界における研究者のネットワークを形成する上で極めて有効であるということである。このため、死生学・応用倫理センターは、そのような研究集会の開催を主要な活動の柱の一つに挙げるようになった。もとよりCOEプログラムのように豊富な資金の裏づけがないため、これまでと同様の規模と頻度で行うことはできないが、ささやかであつてもCOEが築いてきたネットワークを維持していく必要があると考

えたわけである。

二〇一三年に開催された国際シンポジウムの大きな意義は、それが死生学・応用倫理センターとして開催した最初のシンポジウムであったという点にある。センターは二〇一一年四月に創設されたが、GCOE「死生学の展開」プロジェクトは二〇一二年三月まで活動していたので、事実上、二〇一二年度が最初の活動の年であった。その意味で、本シンポジウムの報告を『死生学・応用倫理研究』の二〇号という、節目の号に掲載することができたのは、意義深いと考える。

ただし、本シンポジウムが死生学・応用倫理センターが開催した最初の国際シンポジウムであったにせよ、問題関心はCOEの段階のものを継承していることは、指摘しておく必要がある。本シンポジウムにご協力いただいたフランス国立極東学院とトゥールーズ大学には、二〇〇四年度の「死者と生者の共同性」、二〇〇五年度の「死とその向こう側」、二〇〇六年度の「死とその向こう側Ⅱ」、二〇〇八年度の「非業の死の記憶——追悼儀礼のポリティックス」（報告書は池澤優・アンヌブッシ編『非業の死の記憶——大量の死者をめぐる表象のポリティックス』、秋山書店、二〇〇九）など、COEの多くのシンポジウムで協力をいただいできており、特に二〇〇八年の「非業の死の記憶」の延長線上に本シンポジウムは計画された。「死者と生者の共同性」と「死とその向こう側」で主題とされたのは、従来、死生観という語で語られていた範疇を、死後にかかわる信仰の問題としてではなく、「死者は我々にとってどのような存在なのか」という問題として再構築することによって、歴史と文化を通して共通する死のあり方を考えることであつた。他界観や死後存在に関する観念は多様であるにせよ、それらは生きることが如何なることであるのかに関する考え方の投影であり、人間は死者とのつながりによって自分の生を意味づけてきたことは共通している。その知見の下に二〇〇八年に「非業の死の記憶」のシンポジウムが開催され、戦争や内戦、虐殺、大災害など、大量の方々が一度に非業の死を

とげる状況を、幅広い時代と文化の事例から扱い、犠牲の記憶がどのように継承されたのか、あるいはされなかったのかという視点から扱った。この問題は暴力と死という、死生学にとって極めて重要な課題であることは言を待たないが、あくまでも死の重要な諸相の一つとして扱ったのであって、一九九五年の阪神淡路大震災のことも論題の一つとして扱われたにせよ、差し迫った目前の問題として考えたわけではない。はからずも二〇一一年三月一日に起こった東日本大震災は、この問題を今まさに我々が置かれている状況として再考することを迫ることになった。

二〇〇八年と今回のシンポジウムのタイトルに共通して「記憶」という語が含まれていることが示すように、非業の死もしくは大量死を考える上でキーワードになるのが「記憶」である。ここで言う「記憶」とは、単に三月一日とその後の数週間の間に私たちが何を見、何を経験したかということだけではない。もとより地震と津波の犠牲になった方々の記憶は最も重要な記憶ではあるが、単にその思い出ということでもない。もともと二〇〇八年のシンポジウムを設定する上で、非業の死と大量死の関係について、次のような基本的な見通しが存在した。如何なる文化においても理想的とされる生と死が存在し、それに反する死が「非業の死」であるが、通常、そのような理想的ではない死を扱う文化的装置（例えば、非業の死を通常の死に転換するための儀礼的行為など）が存在するのが普通であり、それは非業の死をも当該文化の価値体系の中に位置づけることで、一定の意義を与える——その不幸な生と死を一定の意味を持つストーリーとすることで、無意味ではないことを表明する——ものであると言うことができる。例えば、夭折は典型的に非業の死であろうが、その生が完成せず、何ら功績を残さなかったとしても、周囲の愛情と期待の中で生き、従ってその死を何よりも悲しむ者がいるというストーリーとして位置づける、などである。次に「大量死」はもとより非業の死と同じものではないが（このことは二〇〇八年のシンポジウムのコメントで指摘された。池澤・ブッシィ前掲書、三三三頁、三六七頁）

その一部であることは相違なく、基本的には非業の死の場合と同じような文化装置を起動することになることが予想できる。ただ、個別の非業の死とは異なり、数が多いために社会的インパクトを持たざるを得ず、その生と死に賦与されるストーリーも、その犠牲に対し個人を越えたレベルで何らかの説明を与え、あるいはその原因に対する一定の反省を含むものになるはずである。換言するなら、死者の「記憶」とは現在の我々にとつての過去、歴史に他ならず、そして我々は常に過去を一定の意味を持つストーリーとして構成する以上、そこには我々の持つ価値観が入りこまざるを得ない。「大量の」「非業の死」の「記憶」は、単に過去はこうであったという客観的記述にとどまることはなく、何がその死の原因だったのかという問題認識、そしてそのような犠牲を繰り返さないためにはどうすれば良いのかという展望を必然的に含むのであって、従つて理想的な社会のあり方に向かつて行為を起動する力を有することになる。本来的に死者の「記憶」はそのような行為機動力を持つものであると見ることができ、大量の、そして非業の死の場合は特にその傾向が強くなると言えるであろう。

三・一一に関する私たちの「記憶」も例外ではない。地震自体は自然現象であるが、津波の犠牲には社会的・政治的な構造的要因がかかわっていた。それは震災後の救助、支援、復興の動きを見れば明らかであろう。原子力発電所の事故については、そもそも原発の推進自体が政治にかかわることは言うまでもなく、従つて震災の犠牲者について如何なる「記憶」を構築するのかは、日本全体の原発の再稼働にかかわる政治性を帯びることになる。次第に冷静に震災のことを考えることができるようになりつつある中で、喫緊の課題は、如何なる「記憶」を構築し、それを如何に次の世代に語り継いでいくべきかということになるはずである。

しかし、その一方で今回の震災を目の当たりにして、死者の「記憶」の力には限界があるのではないかと感じたことも確かである。日本列島に住む我々日本人は地震はいうまでもなく、戦争や事故を含めて、数多くの大量死を経験してきており、それらを経験した人は、常により安全な社会、災害に抗する文化を作ること

祈って、それらの「記憶」を語り継いできたはずである。三陸地方は一八九六、一九三三、一九六〇年と地震と津波に襲われ、何よりも一九九五年の阪神淡路大震災から一六年しか経過していない。にもかかわらず、今回、痛ましいほどの犠牲を、そして一九九五年と同じような状況が生じることをやはり避けることができなかった。そのことに直面するとき、「記憶」のメカニズムは本当に機能するのかと問わずにはいられない。おそらく単に死者の「記憶」を継承するだけでなく、どのような種類の記憶であるのか、どのような手段で記憶を継承するのかを含め、総合的に問題を再考する必要性に迫られているのであろう。そして、その問題を考えるためには、現在の日本だけに限定するのではなく、過去において、あるいは異文化において、「記憶」のメカニズムがどう機能してきたのかという、人類史的な視点に立ち、そこから学んでいく必要がある。

以上のような問題関心の下に、本シンポジウム「災害が遺したもの——語りつぐ記憶と備える文化」は企画された。テーマとなるのは、我々は過去の災害の「記憶」をどのようなものとして構築してきたのか、そして構築していくべきであるのか、それをどのように継承していくべきであるのか、そしてその「記憶」を、あるいは記憶が内包する理念をより良く生かすにはどうすれば良いのか、この両面にかかわる。その性格から本シンポジウムは、第一部「災害の記憶」と第二部「災害に備える文化」から成る二部構成となった。以下がシンポジウムの構成である。

東京大学文学部死生学・応用倫理センター主催

国際シンポジウム「災害が遺したもの——語りつぐ記憶と備える文化」

日時…平成二五年三月八日（金）一三〜一八時

場所…法文二号館一番大教室

司会…小島毅（東京大学文学部）・榊原哲也（東京大学文学部）

趣旨説明 池澤優（東京大学文学部）

第一部 災害の記憶

報告一 保立道久（東京大学史料編纂所）「地震の神話とタブーの忘却——九世紀の大地震・「貞観地震」の記憶」

報告二 グレゴリー・ボサル（トゥールーズ大学大学院）「東南紀の海岸線における津波による死者の記憶を伝える」

コメント一 島蘭進（東京大学文学部）

第二部 災害に備える文化

報告三 ニコラ・エリソン（フランス社会科学高等研究院）「戦争、台風と商品化——トトナク（メキシコ）社会の経験における社会・環境的断絶としての災害」

報告四 セシル・ブリス（日仏会館・フランス国立日本研究センター）「忘れられゆくものの記憶——弾力的回復^{レジリエンス}への抵抗の一形態」

報告五 石田葉月（福島大学）「低線量被ばく問題を考える——ひとりの福島県民、そしてエネルギー経済学者として」

コメント二 アンヌ・ブッシィ（フランス国立極東学院）

討論

(タイトルや所属は二〇一三年三月現在におけるもの。本誌に掲載するにあたって、タイトルが変更されたものもある)

第一部「災害の記憶」は、東京大学史料編纂所教授の保立道久氏による「地震の神話とタブーの忘却——九世紀の大地震・「貞観地震」の記憶」と、トゥールーズ大学大学院のグレゴリー・ボサル氏による「墓石と記念碑——紀伊半島における社会的・環境的災害とその犠牲者の記憶を支えるもの」の二つの発表から成る。そこでの焦点は、過去の災害の「記憶」がどのように生成され、継承されるのか、その一般的メカニズムを検討することであった。先述のように、災害の記憶は災害を生んだ自然や社会に関する認識に基づき、その災害を意味づけた上で、災害を乗り越え、あるいは回避するための行為を起動する力があると予想することができる。その点では如何なる記憶が伝達されるのか、その内容が重要であることは言うまでもないが、記憶が共同体や社会に共有されることによって始めて伝達することが可能になる以上、共同体が全体として如何なる世界観を有するのか、どのような手段(媒体)と環境の中で記憶が伝達されるのが、記憶の構築と機能に対し決定的な影響を与えるであろう。保立発表は、古代日本における災害が穢れの神に対する信仰の枠組みで理解され、その神に対する祭祀を通して記憶が伝えられたことを示す。ボサル発表は、江戸時代末期の地震の記念碑のフィールドワークを通して、犠牲者の供養儀礼が災害のトラウマを乗り越える機能と共に、災害に関する情報を後世に伝達する機能を果たしていたこと、それは現在でも部分的には機能していることを論じる。近代以前の日本人は、地震を始めとする災害を意味づける大きな枠組みを有していたのであり、そこから逆に、現代の私たちはそのような枠組みを既に有していないことが浮かび上がる。

第二部「災害に備える文化」は、災害をめぐる現に起きている諸問題とそれに対する対応にかかわる三つ

の発表から構成された。フランス社会科学高等研究院教授のニコラ・エリソン氏による「戦争、台風と商品化——トトナク（メキシコ）社会の経験における社会・環境的断絶としての災害」は、メキシコ中東部のトトナカ族における災害の捉え方を論じたものであるが、そこではスペイン征服以前の世界観に基づいて、自然災害だけでなく、グローバリゼーションによる経済的ダメージや環境破壊なども解釈されることが示される。いわば、日本にもかつては存在した災害を意味づける枠組みが今でも機能している例と言うことができるだろう。それに続くフランス国立日本研究センター研究員のセル・ブリス氏による「忘れられゆくものの記憶——弾力的回復への抵抗の一形態」と福島大学教授の石田葉月氏による「低線量被ばく問題を考える——ひとりの福島県民、そしてエネルギー経済学者として」は共に福島第一原子力発電所の事故を扱ったものになる。ブリス発表が焦点をあてるのは、災害を避ける智慧を未来に伝達するよりも、「住民を安心させ」「とどめておく」目的のために支配され、「改変される」記憶のあり方であった。石田発表は、同じ問題を記憶を支配しようとする主張（低線量被曝は健康被害をもたらさない、もしくは影響は無視できるとする主張）の論理構造に踏み込んで詳論したものになる。石田氏はそれらの主張の非論理性を批判するのではあるが、批判の中心はむしろそれらの主張が低線量被曝に関する特定の解釈を独善的に強要している点にあるのだと思われる。地震と事故の影響を最小限に食い止め、復興を一日でも早く成し遂げようとする希望は、それに沿った記憶の構築を強いるのであり、別の記憶を持つ人々（持とうとする人々）を「病的」として排除するのである。

以上の発表を受け、東京大学文学部教授の島蘭進氏とフランス国立極東学院教授のアンヌ・ブッシイ氏にコメントをしていただき、続いてフロアを含めて質疑応答を行った。

さて、本稿冒頭で、「死者」の記憶は未来に向かって行為を起動する力があるが、同時にその力は常に機能するとは限らない欠点があると指摘しておいた。おそらく三・一一の記憶をめぐるこの問題点は、以上の発表

の中で遺憾なく示されているのではないだろうか。かつては日本にも災害を意味づける大きな枠組みが存在し、そのような枠組みを通して我々は災禍を避けるための知を育み伝達してきた。しかし、現代においては我々の文化はそのような災害に備える知からのみ構成されているわけではなく、効率、利便性、発展、既存の組織の官僚制、事なかれ主義などの価値も文化の中に織り込まれている。それらの価値のいずれか——福島の場合は「復興」という価値になるのだろうか——が優先されたとき、記憶は一元的に規定され固定化される。それを記憶の「改変」もしくは「捏造」というべきではないかもしれない。というのは、既述のように、記憶とは後から構築されるストーリーである以上、現存世代の考え方と価値観に従って常に書き換えられざるを得ないからであり、その意味で「改変」は不可避であるからである。しかし、記憶のもう一つのあり方は、それが共同体や社会によって共有される以上、常に多元的にならざるを得ないということであった。常に多面的で流動的であることが「死者」の記憶のリアリティであり、一定の価値観に基づいて記憶を一元化することは、そのようなリアリティを喪失させることに通じる。

死生学に課せられている課題の一つは、そのように一元化され、リアリティを喪失しかねない記憶を常に問いなおすことにより相対化し、失われる危険性のある記憶を発掘することにあるのだと考える。言い換えるなら、支配的な記憶の背後にある価値観、考え方を再考し、新たな考え方を模索し、記憶の再構築を行うということである。今回の震災では約二万人の方が犠牲になったが、それを単なる犠牲者にとどめておくのではなく、将来的に犠牲がより少ない文化と社会を作るのに資する記憶を構築し語り継ぐのでなくては、犠牲者に報いることはできないであろう。本シンポジウムがそのことの機会となることを切に願う。